

〔課題名〕 大型酪農経営における乳牛飼養管理技術の諸問題とその改善策に関する調査研究

〔報告書No.〕 87

〔研究年度〕 平成9～10年度

〔研究者〕 中村 英雄，時田 正彦

1. 目的

大型酪農経営における発展段階の経営技術の実態を把握し、その問題点と解決策を提示し、低コスト生乳生産による企業的酪農経営の確立を支援することを目的とする。

2. 方法

生乳生産量1,000 t/年以上規模の酪農経営体10戸（北海道8戸，栃木県1戸，愛知県1戸）を選定し，それらの各農場間に存在する乳牛の群管理上の技術格差を明らかにするとともに，そのような技術格差を生み出している要因として，経営主の技術力に焦点をあて検討を行う。

3. 成果

調査事例では，方法は様々であるが，どの事例も優れた成果を上げている。どの事例においても発展過程において，当時の情勢，自己農場の経営事情などを分析し，判断し，そして実践することを繰り返し，現在の経営を築き上げてきた結果であろう。事例調査において，経営者能力の高さを窺わせる点を以下に整理する。

1) 明確な経営目標を持っている（全事例）

調査対象農家はいずれも，発展過程の中で，「将来どのような酪農経営を作り上げるか」という明確な経営目標を持ち，その具現化に向けて取り組んでいる。例えば，北海道のB牧場はアメリカの酪農経営への接近をイメージし，大規模経営の中からゆとりを見出すことに目標を置き，それに向けた努力は惜しまない。

2) 資本回転率の高い部門への集中投資（北海道G農場）

限られた労働・土地・資本を用いて経営規模拡大を図るため，最も利益に直結する部門，すなわち生乳生産部門に対して集中的に投資を行っている。このため回転率の低い育成部門を縮小し，更新牛を全面的に外部依存している。このような経営戦略をとるに至った当時の情勢としては，乳牛改良速度が高まり，乳牛の泌乳能力が飛躍的に高まったことで，生乳生産拡大に向けた投資は見事に時代の流れに乗ったといえる。

3) 育成部門を外部に委託（北海道D・E農場）

酪農経営における育成部門は投下資本の回収に時間を要するだけでなく，多大な労力を必要とする。この事例では，地域に立地する公共育成牧場を活用し，育成牛を預託，自己農場を成牛管理に集中させたことによって規模拡大をすすめてきた。

4) 技術データの蓄積・活用（北海道C・D・E農場）

経営内において、乳牛飼養管理技術にかかわる情報はその種類は少ないものの、一つ一つの情報は非常に有益なものが多い。C農場ではその情報として乳牛管理（泌乳・繁殖など）・飼料給与・飼料品質・飼料栽培といった各データを日頃より詳細に記録、保存している。それらデータをもとに分析し、技術力向上に活用している。一方、D農場は技術データのうち、乳検データを利用し、搾乳牛の成績から後継候補牛を選抜している。その他、E農場では体細胞データを利用し、要治療および更新に向けた淘汰牛の選定や、飼料分析データから、自己農場の飼料給与設計を外部機関に依存するとともに、経営主自らも飼料の組み合わせを種々アレンジしている。

このように各種データの蓄積や活用は、技術の発展過程において多大な影響を与えている。しかし、一方では個体情報など技術データがほとんど蓄積されない中で技術発展を遂げた事例があることも事実である。

他方、都府県の事例であるJ農場では、経営トータルで成果を上げることに主眼を置き、個々の詳細なデータを重要視していない。I農場も乳検や飼料分析を実施しているが、取り組み姿勢はJ農場と同様である。あくまで「群」としての成果を重視する考えである。

5) 支援組織を活用（J農場）

技術の発展過程には、自助努力により発展を遂げたケースと、外部支援組織を活用することにより発展を遂げたケースとがある。J農場はまさに後者のケースであり、「酪農経営は個人の責任において運営するものである」との当該組合の活動方針に基づいて組織された飼料配合組織やふん尿処理組合、そして肉牛・ETなど各種部会を有効に活用し、発展した。さらに組合では生乳生産枠の売買制度を導入し、酪農家の生産意欲の高揚につなげる施策を積極的に取り入れるなど、充実した経営管理のもとで発展させた事例である。

これらの調査結果から、大型酪農経営において必要な経営者の技術力は、①情報収集力、②分析力、③計画力、④決断力、⑤実行力であるとまとめることができる。

4. キー・ワード

大型酪農経営， 経営者， 飼養管理， 群管理， 支援組織